

特 集

資料解題

奥むめおコレクション ——暮らしに根づいた女性運動の軌跡——

上 村 千 賀 子 ・ 斎 藤 慶 子 ・ 渋谷 晴 子

1. コレクションの概要

「奥むめおコレクション」は、今年度、遺族から国立女性教育会館に寄託された奥むめお関係所蔵資料である。本コレクションは約1,000点の資料からなり、文書、新聞記事、雑誌、写真（含アルバム）、動画・音声、チラシ・パンフレット・冊子・ポスターなどから構成されている。その大半は戦後の資料である。

戦前の資料には、新婦人協会機関誌『女性同盟』、婦人セツルメント、「働く婦人の家」の写真や建物平面図などがあり、婦人参政権運動や働く女性のために奔走する奥の活動を具体的に示すものである。また、平塚らいてうなどの著名人の生原稿も残されている。

戦後の資料は、本コレクションの中樞をなしている。主婦連・主婦会館、消費者運動、国会・審議会及び中央・地方行政関係資料などは、「台所と政治」を結ぶ精力的な活動を展開した奥の社会参画の軌跡を今に残すものである。

2. コレクションにみる奥むめおの社会参画への歩み

2.1. 戦前～戦中期

(1) 婦人参政権運動

奥は平塚らいてうに請われ、1920年に新婦人協会理事に就任する。新婦人協会は、婦人参政権の第一歩として、「女子」が政治集会に参加したり、発起人になっ

たり、政党に加入することを禁止する治警法第5条を改正する請願運動を展開し、部分的とはいえ、女性の政治的権利獲得に成功した。

1921年、こうした新婦人協会の活動について、山川菊栄は、「労して益なき議会運動」とであると批判した。これに対して奥は、「治警法第5条という存在すら知らない婦人たちに、その悪法の意味を知らせただけでも意義は大きいはずだ。婦人自身の自覚を促すために、ブルジョア非ブルジョアも手を携えて団結しましょう」と訴える。このときの山川と奥の論争を掲載する雑誌『太陽』の記事には、すでに、大衆婦人覚醒のための実践的活動への奥の志向が現れている。

(2) 働く女性の支援

治警法第5条改正をなしとげても、女性たちは何の変化も感じず、日々の生活に追われていた。そんな現実を憂いた奥は、すべての女性が婦人参政権を欲し、政談演説を聞きたいと思える生活の基盤を作ることを願うようになった。そのために、1923年4月、職業婦人社を設立し、同年6月には機関誌『職業婦人』（その後、『婦人と運動』→『婦人運動』と改題）を発行する。1941年の廃刊に至るまで、さまざまな職業の女性たちが寄稿した機関誌をひもとくと、それが彼女たちの心のよりどころとなっていたことがわかる。

また、働く女性を支援する奥の実践として、働く婦人の家の運営が挙げられる。働く婦人の家の建物平面図やそこに集う女性たちの活動を描写した写真アルバムからは、「大勢の職業婦人が自治的に協力して、生活の向上をはかり」、互いに助け合いながら「職業婦人の

社会事業を育ててゆく」という奥の理想が着実に実現されつつあったことを視覚的に読み取ることができる。

さらに、1926年、奥は消費組合運動に接近し、「消費を司る主人公」である「家庭婦人にとって、一番しっくりくる運動」として注目した。そして奥は、1928年、女性の手による女性のための消費組合として婦人消費組合協会を結成する。次いで1930年、東京・本所にて婦人セツルメントを開始し、地域の女性たちと協力して託児事業などを行い、生活の合理化・共同化に取り組んだ。奥は、働く婦人の家と並んでこの施設を、「婦人の社会学校」「婦人が働きつつ学び、学びつつ広い社会に働きかける所」と考えており、奥の社会参画の独自性を示す重要な活動であるといえる。本コレクションには、婦人セツルメント開始時の写真や「婦人セツルメント 保育園だより」など、当時の様子を詳細に示す資料が所蔵されている。

奥は、総力戦体制下で初めて公職に就き、厚生省や大政翼賛会の委員として、婦人労働政策に「女子の保護」を盛り込ませようと努力を重ねる。著書『花ある職場へ』は、戦時下という時代の趨勢に憤りながらも、働く女性たちの「保護」と「福祉」に専心していた奥の姿を映しだしている。

2.2.戦後

(1)主婦の団結

戦後、消費者としての主婦の声を結集する組織の必要性を痛感した奥は、1948年「主婦連合会」を結成し、身近な家庭生活の面から社会・政治・経済問題に取り組み、物価値上げ反対、科学的品質検査に基づく不良商品追放などの運動を展開する。

『主婦連たより』『台所と政治』・主婦大会や主婦の店選定に関する資料・アルバムなどからは、主婦連設立の契機となった不良マッチ退治主婦大会や物価値上げ反対全国主婦総決起大会がどのように組織されたかを再現することができる。また、『主婦連たより』1号には、戦後の混乱と生活の困難に立ち向かう主婦の団結による活動を「楽しい闘い」として呼びかける奥の指導者としての心構えが示されている。その他、全国消費ゼミナールや主婦大学・各地の生活展のプログラムやポスター、主婦連のシンボル「しゃもじ」、幟も所蔵されており、戦後の自発的な女性団体活動発生の歴史を辿る上で貴重な資料である。

1956年、主婦連の活動拠点として、研修・宿泊室、日用品試験室を備えた主婦会館が東京・四谷に完成する。主婦会館の設計趣旨、パンフレット、アルバムは、戦前からの奥の夢が遂にここに実現したことを表している。総工費1億2,000万円、うち1割が主婦の募金、9割が企業や有力者からの寄付である。募金に寄与した「主婦手帖」や主婦会館建設寄付金領収書の束は、奥の政治力がいかに大きかったかを物語っている。

1957年、寄付金による婦人会館建設が全国的な機運となり、1961年には全国的な情報交換の場として「全国婦人会館協議会」が設立され、奥が会長に就任する。情報交換の媒体として1957年から発行された『婦人会館ニュース』は、戦後の婦人会館設立の歴史を辿る上で不可欠な資料である。

(2)台所から政治へ

戦前「既成政党頼むに足らず」と政治運動から離れた奥ではあったが、「茶の間や台所にある悩みや願いや希望を、政治の大きなテーマにのせたい」と考えるに至り、1947年から18年間参議院議員をつとめる。1958年、国会議員として北・中・南米や西欧諸国の視察を行い、その際の詳細な手書きの記録が残されている。主婦会館に設置された日用品試験室のアイデアは視察で訪れた施設から得られたものである。参議院議員としての最も大きな仕事は、1960年、池田内閣における生活省設置の要望で、消費者行政を専門とする機関を作るよう訴えた。1965年に経済企画庁内に国民生活局設置という形で奥の提案は実現する。コレクションには奥の原稿「国民生活局についての考へ方」が所蔵されている。

台所と政治を結びつけるもう1つの活動は、消費者としての主婦による異議申し立て・提案運動である。その最初の典型的な活動が1949年の「主婦の店」選定運動である。「主婦の店選定基準」「主婦の店六ヶ条」を掲げたポスターなどは、主婦が共に身近な問題について消費者の視点から提案し、現状変革へと至る過程を示す貴重な資料である。また、運動で使用された「優良店投票用紙」などの所蔵品もある。『主婦連たより』第2号には、「主婦の店選定業者名簿」が掲載されており、運動の影響力の大きさを物語っている。運動は物価安定に貢献し、同年の米価値上げ反対運動、1955年10円牛乳運動、1957年国会議員の歳費値上げ反対運動などの消費者運動へと発展した。

3. コレクションの意義

戦前期における「働く女性への支援」は、現在の「仕事と家庭の両立支援」に繋がるものである。そして、台所と政治を結びつけた戦後の消費者運動は、今まさに世間を騒がしている‘賞味期限改ざん’‘産地偽装食品’問題摘発の先行的事例である。「人々の暮らし」に基盤をもつ奥の思想と活動であればこそ、時代を経て、今日の私たちが直面する身近な問題の解決に重要な示唆を与え、そしてそこに、私たちは未来を開く鍵を見出すことができるのではなかろうか。本コレクションの資料を読み解くことの現代的意義は大きい。

これまでの奥むめお研究の多くは、戦前期の思想や活動に焦点が当てられてきた。今後は、本コレクションの大半を占める戦後資料に基づいて、戦後における奥の思想の発展と、奥がリーダーシップを発揮した消費者運動の展開過程を考察し、暮らしに根づいた社会参画の内実と方途が明らかにされることを期待する。

〈参考文献〉

奥むめお 1921 「私どもの主張と立場—山川菊栄氏の『新婦人協会と赤欄会』を読みて」『太陽』 8月号:150-153

1924-1941『職業婦人』(後に『婦人と労働』、『婦人運動』と改題)

1925『婦人問題十六講』新潮社

1941『花ある職場へ』文明社

1952『台所と政治』全日本社会教育連合会『婦人団体シリーズ2』大蔵省印刷局

1957『あけくれ』ダヴィッド社

1958『私の履歴書第六集』日本経済新聞社

1988『野火あかあかと—奥むめお自伝』ドメス出版

主婦会館 1957『婦人会館ニュース』No.1

山川菊栄 1921 「新婦人協会と赤欄会」『太陽』 7月号:135-138

(うえむら・ちかこ 国立女性教育会館客員研究員)

(さいとう・けいこ 日本学術振興会特別研究員・川村学園女子大学非常勤講師)

(しぶや・はるこ お茶の水女子大学大学院博士後期課程)